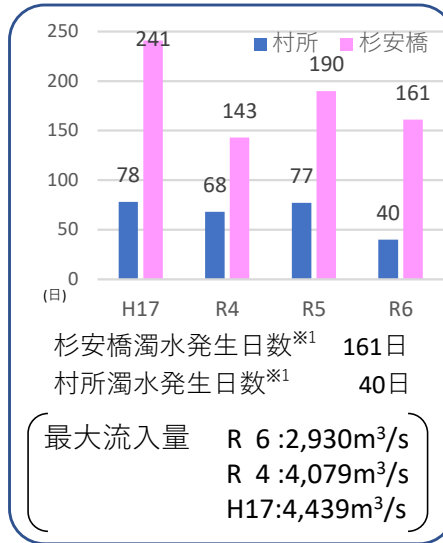
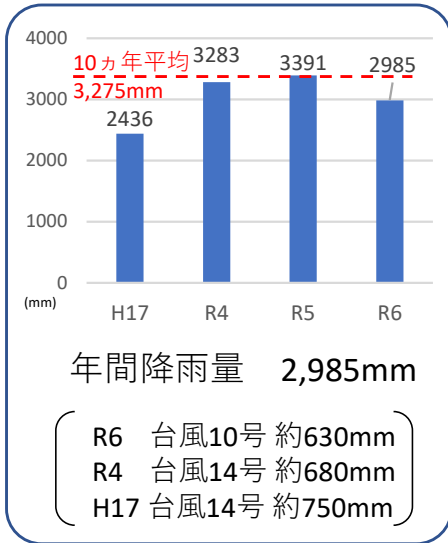


～ 令和6年度の主要対策 ～

2 中下流域

(1) 濁水対策の実施状況等



選択取水設備切替 6回

上部取水日数 118日
下部取水日数 247日

※1 年度 (4/1～3/31) の集計

非常用放流管からの放流 4日
〔 10/8～ 10/11 (4日) 〕

濁水長期化日数 121日

梅雨前線 25日^{※1} (濁質量 約7,300t)
台風10号 38日^{※1} (濁質量 約20,800t)

※1 村所 (西米良村) - 杉安橋 (西都市)

(2) 中下流域モニタリング結果 (調査関係資料)

【水質】
一ツ瀬川本川においてSSの値が9月に環境基準を超過した。

一ツ瀬橋下流ワンド

【底質】
化学成分 (COD、有機炭素等) についても汚れた底質の指標 (mg/L) 以内であり、特段問題ないと考えられる。



写真はイメージ

【ヤマトシジミ】

生息密度が低い状態ではあるが個体群が維持されていることを確認した。今後も回復過程に注視する。

金丸堰下流



R5



R6

【アユ】

ダム下流：産卵箇所数・流下仔魚数はR5年度と比べて減少。
ダム上流：環境DNA調査（R6年度3月）で陸封アユの残存を確認。



オイカワ

写真はイメージ

【魚類】

出水期前は、概ねこれまでの変動の範囲内であったが、出水期後は例年より減少傾向にあるため、今後も回復過程に注視する。



カワゲラ

写真はイメージ

【底生生物】

出水期後は、ほとんどの地点でR4年台風前における変動の範囲内であり、重要種も増加。回復傾向を確認。



写真はイメージ

【水生植物】

全体的に確認種類が少なかったが、いずれの地点もこれまでの変動の範囲内であり、今後回復してくるものと考えられる。

(3) 対策に対する評価

①濁水対策

令和6年度の主な出水は、6月下旬の梅雨前線、8月下旬の台風10号によるものなどがあつた。

a) 村所地点清水化からの一ツ瀬ダム清水層（7m）形成状況【別紙1参照】

- 6月下旬の梅雨前線による影響で約540mm（西米良）の降雨があり、貯水池内へ最大約7,300tの濁質が流入。その後の濁水排除運転により、5日間で7m以上の清水層形成を完了させた。
- 8月下旬の台風10号による影響で約630mm（西米良）の降雨があり、最大約20,800tの濁質が流入。その後の濁水排除運転により、4日間で7m以上の清水層形成を完了させた。
- いずれの出水においても、目標としている概ね2週間以内の清水層（7m）形成を確認。

b) 冬期対流による濁水長期化（越年）を回避する取組み【別紙2参照】

- 台風10号後も断続的な降雨があり、10月1日の濁質量が4,900t（換算濁度28ppm）であり、濁水分布状況からも10月末の換算濁度25ppm以下へ低減できる見通しが立たなかった。
- 流域関係者との合意形成のもと放流管を活用し、4日間の濁水排除を実施した。
- その結果、10月末の濁質量は2,100t（換算濁度11ppm）まで低下し、冬期対流による濁水長期化（越年）は無かった。

②中下流域モニタリング

- R4年度の台風14号に伴う大規模出水により河川が攪乱されたことから、R6年度も引続き、回復過程を注視し、モニタリング調査を実施した。
- R6年度のヤマトシジミの個体数については過去より少ない状態が続いている。
- R6年度のダム下流のアユの産卵場数及び流下仔魚数については年間を通して少なかった。しかし、R4年度の台風14号に伴う大規模出水により個体数が著しく減少又は消滅した可能性があると考えられていたダム上流の陸封アユに関しては、環境DNA調査の結果、R6年度3月時点で残存を確認した。
- R6年度の魚類の種類・個体数については、出水後はこれまでより少ない地点がみられたものの、出水期前のほとんどの地点でR4年度の台風14号前における変動の範囲内であったため、R6年度の出水等による影響を受けたと考えられる。そのため、今後も回復過程を注視する必要がある。
- R6年度の底生生物については、出水期前後のほとんどの地点でR4年度の台風14号前における変動の範囲内であり、回復傾向にある。
- R6年度の水生植物については、過去3番目に少なかったものの、いずれの地点もこれまでの変動の範囲内であり、今後種数が回復してくるものと考えられる。
- 下流域のモニタリング調査については、今後も調査を継続し、河川環境の回復過程に注視していく。